

〈8月の御言葉〉

主は羊飼、わたしには何も欠けることがない。(詩編 23 篇 1 節)

いつの時代も、国の指導的立場にある人の役割は重要です。その人の決断が国の命運を決することになるからです。ダビデはイスラエル王国の王でした。彼はしばしば理想の王と称えられますが、何一つ落ち度のない人だったわけではなく、重大な過ちを犯したこともあります。けれどもダビデはイスラエルの王に求められる最も大切なものを持っていました。それは神への揺るぎない信頼であり、その姿勢は生涯変わることはなかったのです。

彼のその姿勢は小さいときから培われたものであることを示す出来事があります。彼が羊飼いをしていた少年時代に、ペリシテの戦士ゴリアトを倒したという出来事です。神は必ず共にいてくださるとの揺るぎのない信頼が、ダビデに力を与えました。ダビデは王となっても、おごり高ぶることなく、自分の力を過信することなく、神の御手に依り頼む謙虚な姿勢を崩すことはありませんでした。

そのダビデが自らの生涯を振り返ってうたった歌が詩編 23 篇です。「主は羊飼、わたしには何も欠けることがない」と彼は歌いました。「欠けることがない」とは、ときが良くても悪くても、わたしに神の慈しみの御手が届かないというようなことはありませんでしたという、極めて深い神への信頼の言葉にほかなりません。わたしたちもまたダビデのこの揺るぎない信頼へと導かれたいものです。

(久野真一郎)